

調査報告：『どちらなきりしたん』のキリスト用語と『日本国語大辞典 第二版』

岸本恵実

1. 本稿の目的

16世紀半ばから17世紀前半までのカトリック日本宣教においては、おもに教えに関する語について、ポルトガル語・ラテン語・スペイン語の原語を翻訳せず音写して日本語文中に用いていたことが知られている。本稿ではこれらをキリスト用語と称する。キリスト用語は、日本語史では外来語の一部として、表記、意味用法などの面から数多くの研究がなされてきた。

キリスト用語は、日本のイエズス会が刊行したキリスト版など16・17世紀に成立したキリスト文献に使用されただけでなく、キリストを批判する排耶書や明治・大正期に創作された南蛮文学作品に採用された。また、しばしば転訛した形で潜伏キリストの間に伝えられた。その結果として、国語辞典類に立項されている語が少なくない。

キリスト用語は日本語の一部であるとともに、キリスト教用語の一部でもあるので、国語辞典だけでなく『日本キリスト教歴史大事典』（1988、教文館）などキリスト教に関する辞典類にも採用されている。キリスト用語の一覧としてはたとえば以下の書が知られる。

『日本キリスト教歴史大事典』（1988、教文館）付録「キリスト主要洋語略解」

『日本史小百科キリスト』（1999、東京堂出版）付録「キリスト用語集」

『キリスト教用語辞典』（1954、東京堂）附録「キリスト用語」

（下記は各書収録資料の用語のみ）

『キリスト書 排耶書』（1970、岩波書店）「洋語一覧表」

『キリスト文学双書』（1993～、教文館）各巻末「洋語一覧表」

キリスト時代の文献と、現代の国語辞書、キリスト教用語一覧をつき合わせたときに、表記のゆれや合成語の区切り方、語釈以前に、立項の採否に違いが少くないことが確認される。辞典は、どの辞典も独自の目的と編纂方針のもと作成されているから、立項・語釈のあり方が異なるのは当然のことである。こころみに、現代における最大の日本語辞典『日本国語大辞典 第二版』（2000～2002、小学館、以下「日国」と略記）に立項されたキリスト用語を『どちらなきりしたん』（1600年長崎刊ローマ字本・国字本、1592年天草刊ローマ字本、1591年頃刊国字本）と比較したところ、『ぎやどペかどる』（1599年刊）、『こんてむつすむんぢ』（1610年刊）などのキリスト版も多く引用されているが、『どちらなきりしたん』1600年長崎刊国字本がキリスト用語の主要な典拠とされたことが明白であった。

そこで本稿では、『どちらなきりしたん』のキリスト用語を日国と対照させ、立項の特徴を明らかにする。本稿では立項に焦点を絞り、見出しの語形や語釈、用例については一部言及するのみとした。

2. 調査方法

使用資料 冒頭に本稿での略称を記す。

日国：『日本国語大辞典 第二版』（2000～2002、小学館） 項目 503,000。¹

「総項目数 50 万、用例総数 100 万を誇るわが国最大規模の国語辞典。」

(参照したその他の国語辞書)

時代別：『時代別国語大辞典 室町時代編』（1985～2001、三省堂） 項目 70,000 超。²

「室町期から織豊期に及ぶ約 200 年間の言葉を対象とし、室町時代を映す多彩な語彙を幅広く採録。」

大辞泉：『デジタル大辞泉』（ジャパンナレッジ版、小学館） 項目 311,304。³

「現代日本語を中心に、カタカナ語、古語、専門語、故事・慣用句など 31 万 1,304 項目を収録。」

どちりな：『どちりなきりしたん』（1600 年長崎刊国字本） 小島幸枝編『どちりなきりしたん総索引』（1971、風間書房）

どち前：『どちりいなきりしたん』（1591 年頃刊国字本） 亀井孝・小島幸枝解説『どちりいなきりしたん：バチカン本』（1979、勉誠社）、亀井孝・H.チースリク・小島幸枝『日本イエズス会版キリスト教要理』（1983、岩波書店）

(参照したその他のドチリナ)

ドチ後：Doctrina Christian.（1600 年長崎刊ローマ字本） 小島幸枝編『どちりなきりしたん総索引』（1971、風間書房）

ドチ前：Doctrina Christian.（1592 年天草刊ローマ字本） 豊島正之解説『ドチリーナ・キリスト教：天草版』（2014、勉誠出版）

調査方法

①『どちりなきりしたん総索引』によりどちりな本文のキリスト教用語、目視によりどち前のキリスト教用語⁴を、日国ジャパンナレッジ版の見出しと対照し、有無を調査する。表記のゆれがしばしばみられるが、語義から同一語と判断できる場合は有とした。

② ①の用語が、語釈に「キリスト教」および「キリスト教用語」を含むかどうか調査する。

3. 調査結果

どちりな本文に見えるキリスト教用語は、『どちりなきりしたん総索引』によれば付表 1 の 140 と、付表 2 の固有名詞 19、付表 3 のラテン語文のみに含まれる 10 がある。

これらのうち、付表 1・付表 2 の合計 159 を日国の見出しと対照させたところ、大きく(a)(b)(c) の 3 グループに分類された。付表 1・2 の語末に付した a, b, c はその分類を表す。以下に各分類の説明と用例を記す。□は日国の見出し・解説・用例の引用である。

¹ <https://japanknowledge.com/contents/nikkoku/> 続く内容説明も左記による（2025 年 5 月 5 日閲覧）。

² <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN00749131> 続く内容説明も左記による（2025 年 5 月 5 日閲覧）。

³ <https://japanknowledge.com/contents/daijisen/> 続く内容説明も左記による（2025 年 5 月 5 日閲覧）。

⁴ ドチ後・ドチ前の標題紙には collegio の語が使われているが、『どちりなきりしたん総索引』では標題紙から採られていないので、本稿でも本文中の語に対象を限定した。

(a) 立項されており、語釈に「キリスト用語」または「キリスト」の文言を用いてキリスト用語と明示されている語⁵ : 102

例 1

アグワ - ベンタ

[名] ({ポルトガル} agua benta)

キリスト用語。聖水。

*どちらに生きりしたん (一六〇〇年版) [1600] 九「こうくはい (後悔) をもてびすばのべんさんをうけ、あぐはべんたをそそき、むねをうち」

例 2

カトリカ

[形動] ({ポルトガル} catholica (catholico の女性形)) 《カトリカ》

キリストの人々が、自分たちの宗教を「正統的」なものとして用いたことば。

*どちらに生きりしたん (一五九二年版) [1592] 六「スプリツサンチカトウリカにておはしますサンタエケレジヤを誠に信じ奉る」

(b) 立項されているが、語釈に「キリスト」の文言がない語 : 33

「→」の左がどちらなの用語、右が日国の見出しである。+は用例にどちらなを引用している見出しを表す。

(付表 1 より) : 16

あべまりや→アベ-マリア+ あめん→アーメン+ いであ→イデア+
かてきずも→カテキズム きりしと→キリスト くるす→クルス+
ごらうりや→グローリア+ さからめんと→サカラメント+ (どち前) • サクラメント
さばと→サバト+ じゆでよ→ジュデヨ+ (どち前) ばうちすた→バプテスト
ばうちずも→バプテスマ ぱん→パン+ (どち前) ほるま→フォーム
みいさ→ミサ ろざいろ→ロザリオ

(付表 2 より) : 17

あだん→アダム あばらん→アブラハム いざべる→エリサベツ
おりべて→オリーブ-さん がびりある→ガブリエル かるはりよ→ゴルゴタ
げれがうりよ→グレゴリウス じよあん→ヨハネ ぜつせまに→ゲッセマネ
ぜらうにも→ヒエロニムス ぱうろ→パウロ ぺいとろ→ペテロ
ぽんしよぴらと→ピラト まりや→マリア みげる→ミカエル
らうま→ローマ 為は→エバ

⁵ すぴりつす (「スピリット」は日国に有)、ぜらる (「ジュイゾ-ゼラル」は有)、へりや (「セスター-ヘリヤ」は有) の 3 語を含める。

例3

グローリア

〔名〕（{ラテン}・{ポルトガル} gloria）《ゴローリア・グロリア》

(1)キリスト教で、「栄光」また「栄光あれ」の意でいう語。

*どちらりいなきりしたん（一五九二年版）〔1592〕二「其の所作はデウスのグロウリヤとなり奉る為なり」

*ぎやどペかどる〔1599〕上・一・八「ぐらうりやと云、至りたる快楽」

*どちらりなきりしたん（一六〇〇年版）〔1600〕四「御ははさんたまりや、てんじゅうにをひてごらうりやの御かぶりをいただき玉ふ事」

(2)ミサ通常文で司祭によって歌い出される最初の語。「神に栄光を」の意をもち、栄光の讃歌、天使の讃歌ともいわれる。死者のためのミサなどでは用いない。

(3)経（たていと）に絹糸、緯（よこいと）には梳毛（すきげ）糸を用いて斜文織りとした薄地の織物。傘地、婦人服地とする。

*モダン辞典〔1930〕「グロリア（装）絹毛交織」

例4

ガブリエル

(Gabriel)

新約聖書では、マリアにイエス・キリストの誕生を告げた天使。ユダヤ教神学では、ミカエルに次ぐ大天使。イスラム教では、マホメットに啓示を告げた最上の天使とされる。

例5

カテキズモ

〔名〕（{ポルトガル} catechismo）《カテキズモ》

「カテキズム」に同じ。

*どちらりいなきりしたん（一五九二年版）〔1592〕六「カテキズモに載せたる事を読まるべし」

*どちらりなきりしたん（一六〇〇年版）〔1600〕一「かてきずもといふ初談議（しょだんぎ）のことはりよりほかにもきりしたんのしらずしてかなはざる事おほきなり」

(c) 立項なし：24

うんさん 為すれま きりづま こんひるまさん さるべ
さるべれじな さんちしも しえんしや すすたんしや せよ
せんちいどす ちもるでい ぢりぜんしや てよろがれす はしえんしや
びえだで べなべんつらんさ ほるたれざ

（このほか、以下の合成語および合成語の一部とみなせる語を含めた。）
きりしたんしゆ くるすのき さん さんた さんち さんちしも

単純に数字から見れば、立項のある(a)(b)は 159 のうち 135 であるから、どちらな本文のキリストン用語は 8 割以上が日国に立項されていることになる。

立項されている(a)(b)のうち、すべての時代の日本語を対象とする日国の特徴がよく表れているのが(b)である。(b)の語は、固有名詞・非固有名詞ともに、例 3・例 4 のように近現代の見出しと統合されていることが多い。とくに固有名詞は近現代の表記に合わせられていて、どちらなと同じ人名・地名と判別しがたい場合が多くなっている。例 5 のように、語源のポルトガル語からキリストン用語であることを推測させる場合もある。これらはキリストン用語と明示されないが、語釈、用例、語源によってどちらなの語と同一とみなせる外来語である。(b)の例から、語釈の「キリストン用語」「キリストン」の語はひとつの目安であり必ずしも使用されていないこと、どちらなと異なる語形で立項されている場合があることがわかる。

(c)は、他のキリストン資料における用例が稀なため立項が見送られたと思われるが、「こんひるまさん」(堅信)「すすたんしや」(実体)のように、教義上重要と思われる語もある。

立項が見送られた語に関して、1591 年頃刊行された国字本と 1600 年刊行の国字本の用語の相違についても述べておきたい。後期版は前期版と様々な点で異なっているが、キリストン用語についても、改訂の結果、前期版のみに見られるものが少くない。これらのうち、日国では「おびりがさん」「じびにだあで」「なつれざ」は採用されている。どちらのみに見られる語で日国に立項されていないのは「うまななつら」「すぴりつあるどんゑす」など 20 ほどあるが、これらは他資料での用例が稀であり、立項の必要性は比較的低いとみなされたと考えられる。

4.まとめ

本稿の調査により、以下一・二のことが明らかになった。

一、日国では、『どちらなきりしたん』(1600 年長崎刊国字本)のキリストン用語の大半が立項されている。

二、ただし、固有名詞など、近現代通用の語形と見出しが統合されている語が少くない。

そして、本稿では扱えなかつたが、調査の過程で下記のような興味深い点が観察された。いずれも今後の課題としたい。

(i) 日国とそのほかの国語辞典(時代別・大辞泉)の間で、立項および典拠選択の方針に差異が大きい。

(ii) 日国・時代別において、既成の日本語(漢語・和語)の語釈に、キリストン特有の意味用法を記述した語が認められる。

付表1：どちらなのキリシタン用語（固有名詞・ラテン語文を除く）：140

あぐはべんた a	あちりさん a	あにま a	あべまりや b	あぼすとろ a
あめん b	あるかんじよ a	あるたる a	あるちいご a	あんじよ a
いであ b	いんへるの a	うまにだで a	うみるだで a	うんさん c
おすちや a	おらしょ a	おりじなるとが a	おるでん a	おれよ a
おんたあで a	かすちだあで a	かたうりか a	かてきずも b	がらさ a
かりす a	かりだあで a	かるぢなれす a	きりしたん a	きりしたんしゅ c
きりしと b	きりずま c	くはれいづま a	くるす b	くるすのき c
けれど a	こむにあん a	ごらうりや b	ころは a	こんしいりよ a ⁶
こんしえんしや a	こんちりさん a	こんぱにや a	こんひさん a	こんひるません c
こんへそる a	さからめんと b	さきりひしよ a	さしちはさん a	させるだうて a
さばと b	さびえんしや a	さるべ c	さるべれじいな c	さん c
さんた c	さんち c	さんちしも c	さんと a	さんとす a
しえんしや c	じゆいぞ a	じゆすちしや a	じゆでよ b	すすたんしや c
すぴりつ a	すぴりつある a	すぴりつさんと a	すぴりつす a	すペりよる a
ぜじゆん a	せすた a	せよ c	ぜらる a	せんちいどす c
ぜんちよ a	だうねす a	ちもるでい c	ぢりぜんしや c	ちりんだであ a
でうす a	てよろがれす c	てんたさん a	てんペらんさ a	どちりいな a
どみんご a	なたる a	なつうら a	ばあてるなうする a	ばあてれ a
ばうちすた b	ばうちずも b	はしえんしや c	ばしょん a	ぱすくは a
ぱつぱ a	ぱてれ a	ぱらいぞ a	ぱん b	ひいです a
ひいりよ a	びえだで c	びすぽ a	びるぜん a	びるつうです a
ぶるがたうりよ a	ぶるでんしや a	べあと a	べあとにち a	べなべんつらんさ c
べにある a	べにあるとが a	ぺにてんしや a	へりや a	ペるさうな a
べんさん c	ぼてんしや a	ほるたれざ c	ほるま b	ぼろしも a
ぼろへえた a	まちりもうによ a	まてりや c	まるちる a	まんだめん a
まんだめんとす a	みいさ b	みすてりよ a	みぜりこるぢや a	めもりや a
もるたる a	もるたるとが a	りべらりだで a	りんぼ a	ろざいろ b
ゑうかりすちあ a	ゑけれじや a	ゑすてれま c	ゑすペらんさ a	ゑんてんぢめんと a

⁶ どちらなにおいて「公会議」「賢慮」の意味で用いられているが、日国があげている語義は「公会議」の方のみである。

付表2：どちらの外来語中、固有名詞：19

あだん b	あばらん b	いざべる b	おりべて b	がびりゑる b
かるはりよ b	げれがうりよ b	じよあん b	ぜずきりしと a	ぜずす a
ぜつせまに b	ぜらうにも b	ぱうろ b	ぺいとろ b	ぽんしよぴらと b
まりや b	みげる b	らうま b	ゑは b	

付表3：どちらの外来語中、ラテン語文のみに使用の語：10

いん	すぴりつすさんち	て	なうみね	ぱあちらす
ばうちぞ	ひいりい	ぺてれ	ゑご	ゑつ